

絶望の淵からの祈り

ヨナ書2章

しかしわたしは感謝の声をもって、あなたに犠牲をささげ、わたしの誓いをはたす。救は主にある。(9)

前の章の終わり、船から海に投げ込まれたヨナは大きな魚に呑み込まれました。魚のお腹の中で何とか命をながらえていたヨナの祈りがここに記されています。

神に背いたために魚のお腹の中に身をおくことになったヨナには、神の前に何の申し開きもできませんでした。自らに絶望するしかなかったのです。暗闇の中でなおも希望を見出すことができるとするなら、それは神の憐れみにすぎるしかありませんでした。最も低いところまで下つたとき、真剣に主を見上げる思いが生まれたのです。絶望の淵で主に祈りをささげたのです。そして主はヨナのどん底からの叫びを聞いてくださいました。ヨナは驚きをもつてそのことを報告します。「わたしが陰府の腹の中から叫ぶと、あなたはわたしの声を聞かれた」(2)。ヨナはここで、預言者として最も大切なことを悟りました。「救は主にある」と。どんな人も自分で自分を救うことなどできません。ただ主の憐れみだけが人を救うのです。そして自分に絶望した者だけが、この真理に到達します。陰府の淵はこの希望への入り口でした。最も低い所に下つたからこそ、ヨナは救いを与える主を発見したのです。自らの罪深さに絶望し、神から完全に引き離されてしまったように感じるとき、そこで主を仰ごうではありませんか。救いは主の御手にあるからです。